メディア教育研究 第3号
Media and Education, 1999, No. 3, 53-60.

研究ノート

メディアを利用した国際教育の可能性
—NGOドキュメンタリー映画—

マリー・トーステン

女性たちは、家族、村ごとに、地域ごとに団結し、地球を変えつつある。
ヒラリー・ロダム・クリントン

キーワード
国際教育、エンパワーメント、「下からのグローバル化」、メディア・リテラシー

「国際教育」という言葉は、少なくとも2種類の意味を含んでいる。第一の意味は、学生・教育者・機関の間で国際的な連係を作ることである。このため国際教育は通常、学校運営の一部と考えられている。

国際教育の第二の意味は、これらのつながりを世界についての学習に実際に役立てることである。この意味では学校運営の一部ではなく、教育課程である。高校や大学の授業で、また国際機関、非政府組織などの非営利団体や博物館のプログラムを通して、世界について何を、どのように教えるかという意味である。この種の国際教育、別名「世界教育」は、「国際関係」を教育するための手段である。公式、非公式の授業に加え、体験講習会、地域活動、博物館の展示品、パンフレット、ウェブサイト、映画などもその例となる。言い換えると、一般大衆に対するのと同じように学生に国際的な事柄を教えるという教育である。

最近、国連などの国際機関（IO）や多数の小規模な非政府組織（NGO）の役割が広がり、第二の意味での国際教育に携わるようになってきている。IOやNGOは基金を集配するだけでなく、社会的で、時には政治的な大衆教育を担っておりそのさいに、メディアの役割は特に重要である。この10年間で、NGOの数は急激に増加しているが、同時にさまざまな形のメディアがめざましい発展を交わせている。この2つの要素が交わり、国際機関が多種多様のメディアを効率良く利用するとき、国際教育に関する新しい見方——世界に関する積極的な思考のための新しい方法——の誕生が期待できるのである。

国際教育の新しい見方の例を紹介するため、本稿では、アメリカの衛星教育番組で民間向けに放送された、一つのドキュメンタリー映画について述べてみたい。非政府組織（NGO）の製作による1997年のドキュメンタリー映画『Hope is a Literate Woman(HLW)』[1]は、世界中の視聴者に女性の識字能力に関する新しい視点を提供した。ある基準で見ると、HLWは国際教育を前述の第一の意味として捕らえており、10カ国の女性とNGOの識字プログラムとの関係に注目している。しかし、別の基準で見ると、この映画は単に女性の教育についてのものではなく、大衆に「世界」について教える重要なパイプ役として機能している。本稿では、『Hope is a Literate Woman』を、とくに大学レベルでの国際関係の教育題材として吟味したい。

メディア教育開発センター外国人研究員　ハワイ州東西センター

HLWは、NGOの共通のスローガンである、「グローバルに考え、ローカルに行動する」という概念を具体的に描かれている。この言葉は、識字教育を通じて地域的な問題を解決すべく働きかけている一般の人々――読み書きのできる労働者や女子生徒――の現状を表している。映像に次々と現れる女性達の並外れた決断力を見ていると、問題解決の技術を世界中で分かち合うことに関して、また、国の貧富の差にかかわらず多くの女性に共通の地域的、個人的な問題に関して、グローバルな問題として考えさせられる。HLWは、識字教育プログラムが、単なる読み書き教育以上のものであることを教えてくれる。映画で紹介される全てのケースにおいて、女性が集まり、状況改善のためにお互いに協力するということ事体が、一方では地域共同体における草の根の政治的運動、いわゆる地域のイニシアチブというものに発展していることがわかる。女性は、識字能力を身につけることで、生活上の身近な問題を解決する能力を開発していく。公衆衛生、農業、栄養管理、建設、法的な問題、エイズに関する啓発、麻薬や売春からのリハビリ、子供たちの教育、地域共同体の政治参加など、全てのローカルもしくはグローバルな問題に対して、彼女たちが必要とする教育とは何かを教えてくれる。

カリキュラムの充実化（Curriculum Enrichment）とメディア

国際教育――前述の2種類の意味をもつ――の重要性が増している証拠として、アメリカの多くの州立大学が、ほとんどすべての科目に「国際」の要素を取り込もうとしていることが上げられる。たとえばオハイオ州のケント大学では、カリキュラムの国際化に役立つよう、大学の教育資料を中西部各地の2年制機関と共有するよう働きかけている。また、大学側の努力の一環として、複数の教育機関で外国語プログラムや遠隔学習、その他の専門的な連係を増やしていることがあげられる。同時に、国際関係講座や「模擬国連」（Model United Nations）[2]のようなプログラム、あるいは国際問題に関する教員向けの体験講習会を通して、生徒や教員に世界について教えようとしている。

しかし、教員にとって大抵の場合、学生に国際的視点を紹介するための刺激的な題材をタイミングよく手に入れるのは難しい。2年制機関との国際教育プログラムの多くを手がけるケント大学のデニス・ハート博士（Dr. Dennis Hart）は、「国際教育を行うとき、最新の事例についていくことにずいぶんと手をやきます。学習材料を常に新しいものでそろえることは、ものすごい負担です。また、学生達がテレビやウェブ上で目にするあらゆるものの中から、質の良い教育材料を選び出す手助けをするのも気が進みません。さらに、マルチメディアの題材を使うには、著作権の問題が大きくかかわってきます。つまり、適切な教育材料を見つけ出すのは決して簡単ではないのです。数学などの変化の激しくない教科だったらこれほど苦労しないのに、と思うこともあります。」[3]

非営利団体のパブリック・ブロードキャスティング・サービス（Public Broadcasting Service, PBS）は、質の高い映画や他のマルチメディアの教育の開発に力を入れてきた。PBSのアダルト・ラーニング・サービス（Adult Learning Service, ALS）は、衛星でアメリカの大学、高校、図書館に10年以上に渡って教育プログラムを提供している。ALSは最近、加入大学が衛星で豊富なドキュメンタリー映画やCD－ROM、その他の教育材料を手に入れられるという、「カリキュラム題材強化サービス」を始めた[4]。また、ALSが国中の地域レベルの放送局に、高品質のドキュメンタリーを定期放送用に録画するのを許可するという事例もある。ALSが1997年3月に『Hope is a Literate Woman』を衛星で録画できるようにして以来、約150局がテレビの定期番組として放送している。これはPBSにとって経済的なことである。ALSの教育番組は、PBSの看板番組よりもかなり低コス

トである上に、教育番組作成の種類や範囲を広げるからである[5]。

グローバルに考え、ローカルに行動する

『Hope is a Literate Woman』は、世界の女性と成人向け識字教育についての記録映画である。映画の内容は、リテラシー教育を受けている女性自身による語りが中心になっている。初めと終わりに、ヒラリー・ロダム・クリントン（Hillary Rodham Clinton）がコメントを寄せているが、それ以外には国家や政府機関、金融界の代表などは一切登場しない。世界の識字教育プロジェクトがいくつか紹介されており、それらはすべて、それぞれの国のイニシアチブによって行われているように描かれている。しかし実際には、主に二つのNGOがこれらのプロジェクトに影響を与えている。最も重要なのがローバック・リテラシー・インターナショナル（Laubach Literacy International）という識字教育団体（映画の製作者）[6]、もう一つは、女性の教育を援助するソロプティミスト・インターナショナル（Soroptimist International）という団体である。

映画に登場する女性たちはそれぞれ異なったバックグラウンドを持っているが、彼女たちの体験には多くの共通点がある。そこには、『グローバルに考え、ローカルに行動する』ことの重要性がよく描かれている。ローバック・リテラシーはこの点について次のように述べている：

> 「十分な識字能力を持っていない成人は世界に10億人いるが、この人々はまた、世界で最も貧しい人々でもある。……こうしたハンディを背負った人々の60パーセントが女性である。男性に比べて教育を受ける機会が少ないにも関わらず、こうした女性たちは、家庭の健康管理、子育て、食物の生産と調理、生計の維持などに非常に大きな責任を負っている。彼女たちこそ一番教育を必要とし、社会的地位の向上がもめられるのに、最小の機会しか与えられていない。彼女たちが持っている偉大な強さと潜在能力は、まったく実現されていない。また、過酷な搾取や暴力によって、こうした女性たちから自分自身の人生を選択する機会が奪われていることがあまりにも多い。その結果、世界中の労働のうち3分の2を負っている女性たちが、10分の1の収入しか得ておらず、たった1パーセントの財産しか所有していないという状況が出来上がっている。」[7]

国際開発の分野では、「リテラシー」（識字能力）は、しばしば万能薬のように考えられている。識字能力が普及すれば、人口は抑制され、健康は改善され、労働者の能力が向上して雇用者は利益を増し、国家のGDPも上がると言われる。今日の世界では、特に女性の識字能力の重要性が増やしている。

しかし、混沌とした世界情勢の中で、女性たち自身の姿はなかなか見えてこない。『Hope is a Literate Woman』は、世界各地で多様な言語の識字能力を獲得しようとしている女性たちをクローズ・アップし、「ローカル」な視点を与える一方で、この映画は世界中のリテラシー・プログラムに共通な課題に関して「グローバル」な視点も提供している。

ローカルに行動する

識字教育の重要性が強調される中、私たちにその中に潜む危険な側面にも注意を払われなければいけない。それは、“文化帝国主義”と呼ばれるもので、自己の文化的価値観を他者に押しつけ、その基準で他者を判断することである。先進国に住む我々が、そうした態度に陥らずに、教育によって発展途上国を援助するには、どうしたらよいだろうか。逆に言えば、発展途上国の人々が、自らの文化的伝統を維持しつつ教育援助を受けるには

どうしたらよいだろうか。

HLWが示す第一の「ローカル」な視点は、当該地域の口承文芸や技術、教育習慣を識字プログラムに積極的に取り入れることである。文化的伝統は、読み書きの重要性とともに、尊重されなければならない。映画には、生徒が列をつくって座り、従順に黙って授業を受ける先進国の「伝統的」な教室は出てこない。女性たちは、ごく日常的な環境の中で文字を習う。歌や、物語、日常的な冗談といった地域の「伝統」を利用しながら識字能力を獲得している。

例えば、ボリビアのケースでは、コレラの流行で大勢の乳児が死亡した。この地の事情を話すのは退職した女性医師である。彼女によれば、ボリビアの母親の多くは、乳児の健康を守るための基礎的な知識が足りず、多くの母親は下痢の治療法さえ知らなかったという。乳児の死亡は、「しかたがない」と、まるで運命のように受け取れられていた。しかし現在では、幼児死亡率を改善するためのリテラシープログラムによって、母親たちは子育てについて自分の民族の言葉で学んでいる。彼女たちは黒板に「空腹を満たしたければ、種を植えなければならない」と書く場面が映し出される。こして、彼女たちが絶望的な局面をいかに乗り越えているかを、私達は理解することができる。この映画は、こうしたシーンを積み重ねることによって説得力のある作品に仕上がっている。

第二のローカルの傾向は、映画のキーワードの、「エンパワーメント」についてである。

「エンパワーメント」：映画中でインタビューに答える女性研究者は、「エンパワーメントとは、何かを与える力、あるいは何々に向かう力という意味で、何かを支配するための力ではない。人々を強制的にバラバラにして支配し、彼らから個人的あるいは集団的に行動する能力を奪うのではなく、人々が共に生き、生産的かつ効果的に働くための能力を高めることをいう」[8]。

エンパワーメントは「能力付与」の概念である。これは以前からフェミニストたちが用いてきた概念だが、それ以外の地域的な政治運動でもよく使わる。これは、世界は個人から始まるという考え方に基づいている。識字能力のない女性は、様々な問題に立ち向かってゆく自信を持つことができない。しかし、自信と自覚さえ持てれば、彼女たちは自分の家族や共同体を助けることができるだろう。つまり、この映画に出てくる女性たちはリテラシー教育によって問題理解を認識し、解決に向かって自分たちで計画を練り行動につなげていく。つまり、教育とエンパワーメントを同時に獲得しているのだ。ウガンダでのリテラシー指導者は言う。

> 「私たちは、女の子たちに『君たちは重要だよ』と教え、男の子たちには、『女の子たちは重要だよ』と教えはじめたところです。私たちは、世の中の変化について話しますが、変化というのは自分自身の中からはじめないといけないのです。自分を支配する力ではなくて、自分と共にある、自分の内にある力です。自分の内にある力とは、自分自身を知ることによって得られます。自分はどこから来たか。過去は、今の自分にどのように影響を与えているか。過去から何を学んだか。自分自身の内なる力を見つけることこそ人々に力を与えるのです。」

エンパワーメントという概念に示されるように、女性たちが得た識字能力は、それぞれの地域の中で活かされるように配慮されなければならない。ローバック・リテラシーによれば、リテラシー・プログラムに参加する女性は、基本的な識字能力に加えて「批判的思考、文化的表現、様々な行動計画」といったものを同時に学ぶことで、「与える力」を獲得する。女性たちは、「自分たちの文化を尊重しつつ、資源、自然環境に適した行動計画」を発展させることを目指している。こうしたローカルな計画が最終的に目指しているのは、貧困、病気、災害、社会的不平等などの大問

題の解決であることを映画の諸事例は示している。

グローバルに考える

映画の中の女性たちが「ローカルに行動する」ことによって、視聴者はそれを「グローバルに考える」ことができる。「グローバル」の第一のポイントは、識字問題は現代社会のグローバル化の産物であるという指摘である。戦争、移民、脱植民地化、そして経済のグローバル化などの影響から、世界の多くの人々が新しい言語を習得したり、新しい技術を学ぶ必要がでてきた。文盲は非常にグローバルな問題であり、先進国の人々も皆責任の一端を担っている。世界における識字の問題を理解するためには、先進国の人間は自らの特権的な立場を理解しなければならない。識字が、文化と言語のもつ複雑な政治問題と密接に結びついていることに、我々は敏感でなければならない。識字に関する基準は、地域的にも国際的にも、常に変化している。文盲の人々に対して力のある国が文化帝国主義を押しつけないように注意する必要がある。

第2のポイントは、アメリカ国内の識字問題をアフリカ諸国などの問題と区別することなく、先進国と発展途上国が協力して共通の教育プログラムを作ったり、異なる地域の学校同士が互いに教育するといった新しい動きが始まっている点である。こうした総合的な手法は、特定の国家や企業の利益を意図したものではない。映画に示されているように、それぞれの地域への利益、あるいは個人としての女性たちの利益を目的にしている。

また、様々な地域のケースから、識字教育を受ける女性たちには普遍的な感情があることがわかる。第3のポイントは、この映画では、発展途上国の人々と先進国の人々が同じレベルで描かれている点である。アメリカなどの先進国の女性と発展途上国の女性には共通点が多い。女性の識字率そのものがかなり以前から高い日本の場合も、例外とは言えない。筆者はこの映画を日本の学生に見せたことがあるが、その際「日本の女性の識字率は高いが、エンパワーメントの面では遅れています」といったコメントを聞いた。この映画の事例を考察すると、単に受験勉強のためだけの教育では不十分であることがよくわかる。

4番目のポイントは、エンパワーメントについてである。人間が高いレベルの教育を受けても、それがエンパワーメントにつながらないかぎり前進といえないであろう。現在の高度情報化社会を反映し、既に「メディア・リテラシー」という概念が出来上がっている。「メディア・リテラシー」も基本的なリテラシーと同じように、個人のエンパワーメントに繋がっていかなければならない。立命館大学のメディア・リテラシーに関するウェブページでは、メディア・リテラシーは（アメリカの組織の場合）次のように定義されている。「メディア・リテラシーとは、市民がメディアにアクセスし、分析し、評価し、多様な形態でコミュニケーションを創りだす能力を指す。この力には、文字を中心に考える従来のリテラシー概念を超えて、映像および電子形態のコミュニケーションを理解し、創りだす力もふくまれる」[9]。また、同じウェブページ上にある、レン・マスタマン（Len Masterman）の「メディア・リテラシーの18の基本原則」では、エンパワーメントこそが一番重要な課題であると指摘している。「メディア・リテラシーは重要で意義のある取り組みである。その中心的課題は多くの人が力をつけ（エンパワーメント）、社会の民主主義的構造を強化することである」との考え方を示している[10]。

これまで国家の発展の指標として注目されてきたのは、成人識字率、テレビやラジオの普及率、上位の学校への進学率などである。つまり、我々の識字の概念は、技術の発達や学校教育と非常に強く結びついてきたのである。これは、全ての人間は同じように進歩をするものであり、識字能力が高いほど、あるいはテレビやラジオに接する機会が多いほど、学校教育レベルが高いほど人間は

幸せであるという考え方に基づいている。最近ではこうした考え方は人間生活についての直線的思考な（linear thinking）考え方と形容され、批判を受けている。

新しい国際教育

この映画のなかで、もっとも重要な「グローバル」なポイントは、この映画が国際教育としての機能を果たしているということである。我々は、どのようにして地球のことを知るようになるのであろうか。この映画は国家を中心とする伝統的国際関係学の分野やジャーナリズムによるしばしばセンセーショナルなレンズとは異なった視点を提供する。

女性が自分のイニシアチブで教育を獲得するのと同じように、NGOも最近、メディアを積極的に活用している。『メディア』（ここでは、マスコミ、インターネット、ビデオも含む）を通じて国際情勢を教育するわけである。これは国家のレベルばかりを中心する国際政治学とは異なった新しい国際研究の視点を与える。「ローカル」と「グローバル」という両方の視点を持つことによって、いわゆる「下からのグローバル化」ということが理解できる。個人、特に国際政治と関係ないと思われている人、又は権力を持たない一般の人々が、グローバル化とどのような関わりを持つのかが、「下からのグローバル化」のイメージである。

発展途上国の問題についての多くのニュース番組やドキュメンタリー映画は、飢餓に苦しむ子供たちに代表されるような貧困のイメージばかりをクローズ・アップし、絶望的な印象を与えることがあまりにも多い。マスコミ学者であるスザン・モーラー（Susan Moeller）のアメリカの国際情勢のルポルタージュの分析は、このパターンを「同情疲れ」（compassion fatigue）と名づけた[11]。この20年間にわたる分析によれば、新聞やテレビのメディアの国際ルポルタージュは「黙示録の四人の騎手」（four horsemen of the Apocalypse）を中心に構成されている。それは病気、飢餓、戦争、死、のことである。結果として、マスコミから流される国際情勢によって、一般人は国際問題に興味を持つのではなく、逆に興味を失ってしまう。我々は、地球の情勢が我々の力ではどうにもならない、という印象を受け、そしてなすすべもなく、関心が失せてゆく。

しかし、HLWにみられるようなローカル・レベルのリテラシー・プログラムの中には、グローバル・レベルでの様々な貧困や飢餓を解決する希望を見出すことができる。そこでは我々が遠く離れた人々と深い関係を持ち、共通の問題を抱えているという事実をしることができる。ヒラリー・クリントンが映画のイントロダクションで述べているように、彼女たちはまさに「家族ごとに、村ごとに、地域ごとに団結し、地球を変えつつある」のである。

おわりに

衛星教育、ケーブルテレビやインターネットによる教育が急速に進み、NGOによる国際教育プログラムやウェブサイトも近い将来に急増すると予想される。ドキュメンタリー映画『Hope is a Literate Woman』は、ローバック・リテラシー・インターナショナルとソロプティミスト・インターナショナルによる具体的な女性識字教育活動を紹介した。本稿では、それらのNGO自身が撮影した枠組みを中心として内容を追ってきた。多少理想的に描かれている側面もあるが、この映画は国際教育の新しい理解への第一歩を示していると言える。

教育が「上から」のイディオロギーに導かれる時代は終わろうとしている。女性の識字能力が国家のGDPとの関係だけで論じられる時代も終わろうとしている。現代の地球では、「下からのグローバル化」の時代が到来しつつある。『Hope is a Literate Woman』は、多数の女性の経験を普遍的に捉えた、説得力のある映画である。その最も

重要な点は、国際関係や政治的枠組みの中で「見えない」存在であった女性たちを「見える」存在にして描いている点にある。

謝辞：今回の寄稿に際し、ご助力を頂いたメディア教育開発センターの廣瀬洋子助教授、同志社大学の鳥居祐介氏に感謝を表明したい。

参考文献

1）Glenn Ivers『ホープ・イズ・ア・リテレット・ウーマン（Hope is a Literate Woman)』（ローバック・リテラシー・インターナショナル（Laubach Literacy International), producer, 米国PBS Adult Learning Services ドキュメンタリー、1997年)。〈http://www.pbs.org/adultlearning/als/rte/resources/programs/hope. html〉

2）「模擬国連」(Model United Nations) というのは、25カ国以上の高校生や大学生のためのシミュレション教育のことである〈http://www.jmun.org/〉。

3）Dennis Hart から筆者へのE-メール・インタビュー、1999年6月7日。

4）Adult Learning Service, "About Curriculum Resources" 〈http://www.pbs.org/adultlearning/als/programs/ce/index. html〉.

5）Glenn Ivers から筆者へのE-メール・インタビュー、1999年3月8日。

vi Laubach Literacy International『Why Women?』http://www.laubach.org/WIL/whywomen. htm/

6）Laubach Literacy International『Why Women?』http://www.laubach.org/WIL/whywomen.htm/

7）V. Spike Peterson and Anne Sisson Runyan『Global Gender Issues』（Westview, 1993), p. 190。

9）Ritsumeikan University SUZUKI Midori Seminar Japan,『メディア・リレラシーとは？』〈http: www. ritsumei. ac. jp/kic/so/seminar/ML/what-j. html〉.

10) Len Masterman, "Media Education: Eighteen Basic Principles," MEDIACY 17, no. 3, Association for Media Literacy, 1995;『Len Masterman による「メディア・リレラシーの18の基本原則」』に引用されている〈http:www.ritsumei.ac.jp/kic/so/seminar/ML/masterman. html〉.

11) Susan D. Moeller『Compassion Fatigu : How the Media Sell Disease, Famine, War and Death』(Routledge, 1998).

(1999.4.19 受稿　　1999.6.28 受理)

Media and a New International Education:
An NGO Documentary Film

Marie Thorsten

In the past decade, the number of NGOs (nongovernmental organizations) has risen dramatically. At the same time, various forms of media have also proliferated. At the intersection of these two juggernauts, where international organizations take advantage of media, we can look forward to new perspectives on international education - new ways of critically thinking about the world.

This paper will consider a documentary film that was made available to the public through satellite educational programming in the United States. Produced by an NGO, *Hope is a Literate Woman* (Laubach Literacy International, 1997), is available through the Adult Learning Satellite Service (ALS) of the Public Broadcasting Service (PBS), which makes a variety of media resources available to educators.

As this film demonstrates, women in ten different countries use literacy programs at the local level to overcome larger problems of poverty, disease, calamity and injustice. The extraordinary determination of these women in inspires viewers to think globally about the international sharing of problem-solving skills, and about local and personal issues common to many women in both rich and poor countries.

Key words
international education, empowerment, globalization, media literacy.

East-West Center/U.S.A